

2012年3月4日

鈴木健司氏が『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（以下『事典』と略す）の三人の編集委員に対して、『事典』の序文とそれぞれの執筆項目を非難していると人から教えられて読んでみた。題して「『宮澤賢治イーハトヴ学事典』を検証する：先行研究の無視は「研究」足り得るか」（『文教大学文学部紀要』2011-9）。『事典』の「序」に「基本的に、〈権威〉をめざしていない」とあること、また「執筆者の意見を尊重し、既成通念や先行研究をどのように踏まえるか——無視・批判・否定等の扱いについても、執筆者のお考えに委ねてある」とあるのに対して、「「権威」の発生装置として機能していることや、先行研究の「無視」が正当な理由のもとにおこなわれてはいないことを実証する」というところに、その趣旨があります。

まず、「序」に対する「批判」に対して、「序」に署名した編集委員のひとりとして答えておきたい。答えは「これには、答えようがない」である。どんな編集姿勢をとっても、大がかりな事典を編む以上、「「権威」の発生装置として機能」してしまうのだから、そんなことを書くべきでない、という意味ならわからなくないが、「〈権威〉をめざしていない」という編集委員の姿勢に対して「「権威」の発生装置として機能していること」を述べても、「批判」にならないだろう。一般に、権威を振りかざす人もいれば、謙虚な人もいる。権威を振りかざしても権威が地に落ちることもあれば、謙虚であっても「「権威」の発生装置として機能」してしまう場合もあろう。いったい何が問題なのか、よく理解できない。

次に「先行研究の「無視」が正当な理由のもとにおこなわれてはいないことを実証する」ことのひとつとして、鈴木貞美の「ヘッケル」の項目をあげ、鈴木健司氏自身の論考などを「少しも超えていない」のに、先行研究としてあげていないのが不当であるという。「鈴木貞美の解説は、私の判断では、先行研究を超えるものでも、新しい視点から書かれたものでもなく、研究者としての基本的な約束事を守ることのできない「確信犯的な先行研究『無視』の場合」に当たると思われた」と。

わたしの「ヘッケル」の項目は、ドイツの生物学者、エルンスト・ヘッケルの生物学についてのわたしなりの把握とその評価史をごく簡単にまとめ、そして、宮澤賢治におけるヘッケルの意味を説く構成をとっている。どれも、従来のヘッケル理解を超える「新しい視点から」書いている。まず、ヘッケルの生物学については、その「オイコロジー」——今日のエコロジーの租型とされる——が「宇宙の生命エネルギーの循環論」であり、生物

学諸分野を統合するシステムの構想であったということ。このようなヘッケルの解説は、海外の百科事典をふくめて、まず見ないはずだ。そもそも「宇宙の生命エネルギー」というキーコンセプトはヘッケルのものとして流通していない。わたしは解説文中で、それを「生命一元論」と呼んでいる。それをもって、ヘッケルの考えは「機械論」「唯物論」と見なされてきたヘッケルの「一元論」(Monismus)を踏まえているが、そして、それはエネルギー一元論を背景にしているが、エネルギー還元主義ではなく、一切を生成、進化、発展によって説明しようという立場なので、「生命一元論」としている。ヘッケルの「オイコロジー」が生物学諸分野を統合するシステムの構想であったということも、いわれてこなかったと思う。どれも論拠は『生命観の探究—重層する危機のなかで』(2007、以下『探究』)に示してある。

次に、その評価史について、ヘッケルの発生説をエンゲルスが引用していることも紹介してあるが、マルクス主義理論に詳しい人は別にして、今日、広く知られていることではない。ただし、これはイギリスの哲学事典に書いてある(『探究』に参照文献として明示してある)。『事典』には、ヘッケル学説を「レーニンが応用した」と記したが、この背後には、わたしの説が隠れている。『探究』では、ヘッケル『宇宙の謎』についての書評がひとつのヒントとして働き、唯物論のレーニンの段階(根源的物質が自己運動して人間の意識において、自らを開示するというしくみ)が築かれたということを展開している。『探究』を読んでいない人には、かなり新鮮に映るはずの解説だと思う。鈴木健司氏は、この項目の解説でヘッケルについて初めて知ったことが何点かあるはずだ。

そして、ヘッケルの世界観が「物質=エネルギー=生命」(=は同値と見なす)という考えを支えていることを「生命一元論」と呼び、それが宮澤賢治の世界と共通性をもっていることを述べている。これも、新しい観点からの解説である。

ところが、鈴木健司氏は、この項目における「先行研究の無視」を言いたいために、このヘッケルについての解説を「無視」し、もっぱら宮澤賢治におけるヘッケルの意味について述べた部分だけを問題にしようとしている。その「宮澤賢治におけるヘッケルの意味」を述べた部分について述べる前に、わたしは鈴木健司氏があげているふたつの「先行研究」を読んでいることを明確にしておく。

わたしの態度は、鈴木健司氏のことばを借りれば、「確信犯的な先行研究」の「無視」である。だが、それは鈴木健司氏のいう「研究者としての基本的な約束事を守ることでできない」態度のためではない。むしろ、自己顕示のためなどでもない。それは、わたしの学問研究の基本的な態度を貫くために行ったものである。そのような「確信犯的な先行研究」の「無視」がありうるということを鈴木健司氏は知らないらしい。

ただし、鈴木健司氏が、わたしの「ヘッケル」項目に対して、このような非難を行うにいたったのには、いきさつがある。『事典』への執筆依頼に対して、わたしの「見本原稿」に対する疑義を抱き、天沢退二郎氏に、自分の論考を添えて手紙を出したということが、「非難文」のなかで述べられている。

わたしは、その手紙とその論考を読み、そして、返事を書き、『事典』の編集責任者に託した。わたしは、その返事が鈴木健司氏に届いているものとばかり思っていた。が、途中、何らかの配慮が働いて、鈴木健司氏の手許に届かなかっただけらしい。

そこで、次に、2009年7月8日づけ(見本原稿段階)の返事を掲げる(文中[]内は、引用するに際して補った)。そして、その後、何点か補足して、回答としたい。

[2009年7月8日づけ返事]

鈴木健司さま

2009/07/08

天沢退二郎氏と弘文堂編集部を通して、貴兄の申し入れとご論考を読ませていただきました。率直にお返事します。

まず、貴兄の論考を読んでいなかったことはお詫びします。が、読んでいたとしても、見本原稿は変わらないものになったと思います。なぜなら、1、わたしはヘッケルの理論体系を「生命」一元論という語を用いて、1995年あたりから繰り返し論じ、それと宮沢賢治の世界の親近性についても述べてきたからです。たとえば『大正生命主義と現代』(1995)巻頭の提起やNHKブックス(1996)を見ていただくとわかります。2、貴兄のご論考は、ヘッケルの理論について誤解があること、また、賢治が靈魂死滅説に立っているという前提が成り立たないと考えます。

1について。そのころには、まだ科学史の分野でも、ヘッケルの一元論は、唯物論ないしは機械論として理解されており(小野[隆祥]論文が、そのような理解ですね)、それをめぐって、ヘッケルの場合は、ちがう、ということをおわたしは、米本昌平さんらと論議していたので、生命一元論という語を用いて何度もレクチュアしておりました。その際には、もちろん、『生物の不可思議』の「万物有生論」をあげています。記録も残っています。それは、あくまでクローズドの場ですが。

そして、それには、貴兄がふれておられる阿毛さんの論考(そのころ、河出書房新社で毎月行っていた大正生命主義の研究会を基盤として1992年に、わたしが編んだ『文芸』の特集の一つ)が気になっていたことがからんでいます。それは阿毛さんに話したことがあると思います。ほかにも大正生命主義と賢治の関係については書いていますので、2003年に『解

積と鑑賞』から依頼があったというわけです。「賢治の生命観」を書いた際には、主として大塚[常樹]さんの論文を念頭において、ヘッケルと賢治の立場の同一性を示すというかたちで書きました。そのときまでには、小野[隆祥]さんの論文にも目を通していています。そのときは、原子朗氏編の賢治事典の関連項目に一通り目を通して、[ある若い人の]項目の批判を[名指さずに]書いたと記憶しています。その間、二〇〇〇年に、貴兄の論考があることに気がつかなかったのは迂闊でした。わたしにはそういうことがよくありますが、あとで先行研究があったことがわかったときにはあげるようにしています。しかし、たとえ貴兄の論考を見ていても、[今度の見本原稿で、]それにふれたとは思いません。

わたしの立場は、秋枝[美保]さんの研究動向のまとめにもありますが、それまで靈魂不滅か、靈魂死滅か、という問いのたて方がなされてきたことが、おかしいというものです。なお、この問題意識は、昔、恩田[逸夫]さんの論文を読んだときからのものです。貴兄の論文の趣旨は、それで批判したことになりますので、とりあげて論難するに及ばないというのがわたしの構えです。

短いスペースしか与えられない場所というほかに、わたしより年下の人の論文を公開の場で批判する際、まだ就職や移動がありうる人の場合、名前をあげないのが、わたしの流儀です。理由は、その人の不利にならないようにするためです。なお、この流儀については、ある安定した地位にある方から寄せられたわたしの透谷論についての批判に対して、ホーム・ページで公開しながら意見交換をした際に記したことがあります。

もし、貴兄のいうように、賢治とヘッケルの親近性について論じる際に、それを否定した大塚論文にふれなければならないというのでしたら、ヘッケルの「生命」一元論と賢治世界との親近性を指摘した鈴木[龍]の論を、貴兄が無視しているのは、フェアではないですね。単なる指摘にとどまっており、納得できないという不満とともにではあっても、ふれなくてはならないはずですが、いかがでしょう。わたしの1995年あたりからのものは賢治プロパーのものではないですし、一般向けの本ですが、プロパーのもの以外は、また一般向けの本は、先行研究から除外するというのなら、それはそれでまた別の議論になります。そして、先にあげた二著は、今日でも、けっこう美術界、哲学界、近代詩論などの若い人の論文に引用されています。わたしは、もう絶版にしたまま、廃棄してしまいたいのですが。しかし、貴兄の論考を読んでいたとしても、ふれなかつただろうという理由は、上記とは別のものです。

2について。貴兄がわたしの論考に納得いかないのには、いくつか理由が重なったことだと思います。第一は、ヘッケルの理論についての理解のちがいです。貴兄は、原子論とエネルギー論とを、あたかも対立する立場のように考えておられます。エネルギー

クスは、単にエネルギー論というものではありません。原子を仮説のように扱う立場のことです。他方、当時もそれ以前も以降も、1855年にエネルギー概念が統一されて以来、それ(エネルギー論)を認めない人はいません。ヘッケルの場合は、スピノザを無神論=唯物論と呼ぶので(日本人は汎神論と呼びますが)、もちろん、アトムは否定しません。そして、ヘッケルの「オイコロジー」は、エネルギー一元論が台頭する1880年代以前からの彼の考えですが、エネルギー概念抜きには成り立ちません。この点、貴兄の論考には、誤解があるようです。

第二は、それとも関係しますが、貴兄は、賢治は「靈魂死滅」論者だったという立場に立って、ヘッケルとの親近性を論じていますが、これもわたしと根本的にちがいます。先にも述べたように、わたしが賢治を「不滅」論者だったと考えているわけでもありません。仏教の俱舎論は、そのどちらでもないからです。そして、わたしは、その二分法を否定して、生命一元論によって、賢治とヘッケルとの親近性を論じているのです。

『春と修羅』の賢治が「靈魂死滅」論者だったということを示すためには、俱舎論か、賢治のその解釈が「死滅」論であることを示すことが不可欠です。しかし、それはできません。そこで、貴兄は、状況証拠をあげたわけです。貴兄の論法——原始仏教は靈魂死滅論という妻木某らの論が流行っていた、賢治が依拠する俱舎説は、原始仏教に発するもの、それゆえ、賢治も死滅論——という三段論法は「理」が通っていません。

そもそも仏教の根本義は輪廻転生からの「解脱」にあります。死後の靈魂、すなわち「こころ」が死滅するなら、苦も無くなってしまい、解脱も、成仏も成り立ちません。ヘッケルが、ショーペンハウアーを引きながら、自殺を自己救済と論じたようなことになってしまいます。しかし、俱舎論は、心身の変形した何かの実体的なものが想定されており、それが業により、輪廻転生するという考えです。つまり、靈魂死滅論は、仏教以前の[前提とするという意味です]素朴實在論になりましょう。

賢治が心的因果律を考えていたのは、貴兄の書いておられるとおりですが、それを、貴兄のお考えのように、死滅説と直接結びつけてしまうと、まるで心のみが輪廻転生するようなことになり、賢治は俱舎説を逸脱していることになります。その可能性は否定できませんが。しかし、それは靈魂不滅論になってしまいませんか。そうでないとすると、心と靈魂を別物と考えていたとしなくてはなりません。

これに関連して、賢治にとって死の問題が、「中有」か「転生」かしかないと考える人びとが多いのは、実に不思議なことです。貴兄は、「成仏」を忘れていませんので、それだけでも、既存の説を批判しうるのですが。

どのように考えても、仏教の理論をそれなりに知っていた賢治は、靈魂死滅論にも、不

滅論にも立っていないことになると思います。そこで、俱舍論が死後に残るとする心身の変形した、いわば実体的なものと、ヘッケルの死(無機質)の世界と生の世界(有機質)をつなぐ「生命」という観念とを同一視し、一旦は、その証明にあたらうとしたというのが、私の解釈です。これ以外の点で、ここにヘッケルが登場する理由はありません。その意味で、賢治の思想は、20世紀のそれです。

しかし、ヘッケルは靈魂死滅論です。そこで、のちに、その「卑怯な考え」に気づいたというのが私の考えです。これは信仰の揺らぎというようなものではなく、再確認でしょう。どうして、とし子が成仏しえたという確信を語り手が得たのかは説かれていませんが。

もし、ここで状況証拠をあげるなら、とてもやっかいな、誰もまだ論じ切っていない問題ととりくまなくてはなりません。問題は、スペンサーやハーンらが宗教と自然科学との親近性を論じる際の論法にかかわります。端的に言えば、自然科学における実験主義すなわち絶対的超越神に対する不可知論と、不可知論による信仰との親近性の問題です。アインシュタインが自然科学と仏教との親和性を言ったのもそれです。そして、ハーンらの議論を読み齧った日本の仏教者のなかに、古代インド哲学が否定した素朴実在論をもって、奇妙な理屈をいう人が出てきたのです。貴兄があげておられる妻木某もそのひとりというわけです。

ついでですが、それとは逆に、キリスト教と生物進化論は昔からずっと親和性が強いのです。この点も、誤解のないようにお願いします。このことについては、『生命観の探究』に書きましたので、参考にしてくださいと幸尽です。

貴兄とわたしのちがいの考えは、まだあります。第三には「いみじい生物の名」が妙法蓮華経のことだという説にわたしは与しておりませんし、それが定説になっているとも思いません。

貴兄がわたしの仮説に「納得がいかない」のは、よくわかりますが、貴兄の説は成り立たないというのが、わたしの見解です。以上、お含みおきください。

なお、反論には、私信、公開いずれにも、また、いつでも、よろこんで応じます。それによってお互いの賢治世界についての考えが深まれば何よりですから。

[2009年7月8日づけ私信]引用終り

この「返事」が届かなかったので、鈴木健司氏は同じ趣旨のことを、今回の「非難文」で、調子を変えて繰り返し述べたのである。そして、「非難文」を読んで、この「返事」だけでは通じそうにないと思った。そこで、何点か補足しておく。なお、靈魂問題については、先の内容で十分と考えるので、ここではふれない。

①鈴木健司氏は「非難文」のなかで「「ヘッケルの機械論的万物有生論」に関しては、三
五年前、小野隆祥によりすでに指摘されていることである。また、私も一〇年以上前、小
野隆祥の説を受け「万物有生論」に言及した拙稿を世に問うている」と書いている。要す
るに、賢治とヘッケルの万物有生論の関係にふれている先行研究があるのだから、当然、
とりあげるべきであり、無視するのはフェアでないという意見である。

そして、鈴木健司氏は、わたしの「ヘッケル」項目を「論文」として扱い、非難してい
る。事典の項目を「論文」として扱うのは、対象の性格を「無視」したフェアな態度で
はないことは、鈴木健司氏自身も承知しているだろう。

②論証や実証なしに、単なる指摘にとどまるものは、学説とはいえない。説が間違ってい
るのは、誤った学説である。この研究のイロハを鈴木健司氏はわかっていないらしい。

そして、もし、わたしが、「宮澤賢治とヘッケルの万物有生論の関係について」論文を書
くのなら、当然にも、小野隆祥論文の当該論文の目的と構えを明らかにし、ヘッケルに関
して、「万物有生論」を「エネルギーック」(エネルギー一元論)として読むことの誤り
を指摘する。小野隆祥氏とは意見を異にする鈴木健司論文についても、そのヘッケル理解、
および「エネルギー論」の理解の誤りを指摘し、では、どのように宮澤賢治がヘッケルを
了解していたかを説明してゆくことになる。

[こう書いても鈴木健司氏は反発するだけだろう。それゆえ以下、補足する。

小野隆祥氏の論考を読んだとき、賢治研究者にも「ヘッケルの万物有生論にふれている
人がいたのだな」と感心した。「しかし、この理解は困るな」という感想をもった。エネル
ギー一元論者、オストワルトは、アトムを仮説とし、ボルツマンを「最後の原子論者」と
呼んだ。『事典』の「エネルギー」および「エネルギー一元論」の項を参照されたい。

なお、いわゆる「アトムの存在」は、アインシュタインが特殊相対性理論とともにブラ
ウン運動を理論的に解明し(1906)、物質とエネルギーはふたつの考え方の系(system)とし
て考えた。ブラウン運動については、1908年に実験で確証された。エネルギー一元論者の
オストワルトも、その後、アトムの存在を認めたといわれているが、かなりあとのこと
ではないか。特殊相対性理論はかなり早くから、日本でも話題になっているが、アトム説の
再確立については、また、それが、どのように日本に伝わったのか、については、わたし
にはまだよくわかっていない。日本の生命主義思潮のなかでは、ヨーロッパとは事情が大
いにちがったようだ。そこで、『事典』では、ハイデルベルクの不確定論まで書いておいた。

エネルギー一元論に対して、ヘッケルは分子の存在を認めるし、賢治にも電子を「根源

的物質」とする考えがあった。もちろん、賢治はエネルギー概念ももっており、そこで、賢治も「物質=エネルギー=生命」という考えになる。さらにジェイムズ(やベルクソン)の「意識の流れ」=「生命」説(これらは、賛成、反対を別にして、「生氣論」扱いされることが多い)や仏教的世界観などが重なる。全体として汎生命的世界になっている。

もっと、大きな文脈では、19世紀中期からエネルギー一元論が台頭し、物質以外の何かに生命のおおもとを求める説が、”vitalism”として否定された。その「機械論」の中で、エネルギー一元論とアトム説が対立した一時期が、19世紀後期から20世紀前期にかけてあった。

そののち、ヘッケルの弟子のひとりだったハンス・ドリーシュが「ネオ=ヴァイタリズム」を名乗り、「生氣論」対「機械論」の図式で生命論史を整理し、ドリーシュに批判的な人びとも、この図式で生命論の歴史を整理してきた。いま流通している欧米の百科事典も、この図式によっている。わたしは、この図式そのものが困ったものだと批判し、そして『探究』では、オルタナティヴを提出している。なお、これも『事典』には書いていないことである。

わたしは、ドリーシュの生氣論の問題を、日本のマルクス主義唯物論(梯明秀、戸坂潤)と「生氣論」問題として、ずっと課題として考えてきた。が、進化論受容の問題を扱っているときに、この問題について、1970年代から米本昌平氏が指摘していたことに気づいた。1980年代後期のことで、NHKブックスの執筆より前の論文に書いていると思う。

なお、現在、わたしは、20世紀前期の”vitalisms”の多様性について考えている。イギリスの生物学者、E. S. ラッセルが「生物学の自律性」という意味で用いた”vitalism”という論文を『白樺』(1911年10月号)で柳宗悦が翻訳している。「生氣論」として。これには、1990年ころだったと思うが、梶井基次郎の研究をしているときに(「大正生命主義研究会」を呼びかける以前に)、目を通していたが、柳宗悦は「機械論」と対立するものとして、E. S. ラッセルをドリーシュやベルクソンと同一の立場のものとして考えており、わたしは、それに長いあいだ惑わされていた。”vitalism”が「生氣論」と翻訳されているので、惑わされている人は、いまでも多いと思いたい。E. S. ラッセルの論文を原文で読んで、ようやく、ラッセルの立場がわかった。

またなお、ドリーシュの”vitalism”および1920年代における日本の哲学界のそれへの関心については、米本昌平『時間と生命』(2010)に詳しく書かれている。また、この問題をめぐって、いまのところ、米本氏とわたしの考えが細部まで一致しているわけではない。念のため。(補足終了)

要するに、進化論受容史、エネルギー一元論受容史、ヘッケル受容史という研究領域があり、それらと宮澤賢治研究は交叉する。それらにとって、宮澤賢治のそれは、一コマにすぎないが、宮澤賢治研究にとって、ヘッケルの受容史は一部にすぎない、という関係である。それゆえ、『事典』の「ヘッケル」項目は、ヘッケル受容史のなかに宮澤賢治を位置づけ、かつ、宮澤賢治にとってのヘッケルを解説するという構えで書いてあるので、先に述べたような具合になっているのである。

どうも、鈴木健司氏は、このような研究の交叉するあり方を前提にした項目の構成も、その中身も理解できないらしい。そしてヘッケル「万物有生論」の中身を小野隆祥氏や自分の理解を鈴木貞美が訂正していることに気がつかないまま、賢治と「万物有生論」の関係を指摘したことをもって、「先行研究」とし、それを「無視」していると非難しているのである。

③そして、事典の項目執筆は、論文ではない。そんなことくらい鈴木健司氏も承知しているはずだが、わざと論文扱いしている。それによって、悪意のある誹謗中傷に近い記述になっていることがわかっているのだろうか。

一般に事典の項目の場合、とくに「学事典」を名乗っている場合は、先行研究を総括することが求められるとわたしは考えている。が、問題設定がまちがっている、また思いこみを前提にした論文については、いちいち批判しているスペースはない。実際、「ヘッケル」項目で、わたしは、先行研究を名指さずに、その問題設定の誤りを指摘している。そして、それには鈴木健司氏も気づいており、「全面否定」という語を用いている。鈴木健司氏の言い分は名指して「全面否定」してほしかったという意味になる。

わたしは一般向けの著書でも、今度の『事典』でも、批判的な媒介とした参考文献はなるべくあげるようにしている。が、とりあげるに値しない場合や「返事」で書いたようなケースには、なるべく名指しで書かないようにしている。いちいち批判を書くだけの紙副がない場合も多いが、「裏側で批判する」態度、読む人が読んでわかればよい態度をとることが多い。それについて「読んでいくせに参考文献にとりあげない」と咎めるのは、批判されていることが読みとれない、つまりリテラシーが低いとしか言いようがない。

それとは別に、こういうこともある。「二葉亭四迷の『浮雲』が日本で最初の言文一致体小説」などというデタラメ（幸田露伴が文三さんの煩悶する内面の途切れ途切れの記述スタイルを「針の目ぼちぼち」と呼び、それを指して「言文一致」と呼んだことはあるが、そしてそれは新しい書き方のはじまりではあったが、『浮雲』を実際に眺めてみれば、「だ、である」体のいわゆる「言文一致」ではないことなど誰にでもわかる）を、誰が最初に唱え、

誰が踏襲してきたか、などということは、いちいち調べる気にならない(「する、した」体に「ね、さ、よ」がついた口語体、それを地の文に用いた文章は江戸時代に、いくらでも見つかる。それについては批判的媒介にした文献もあげて、論じてきた)。

事典の項目は、行数の制約もきつし、あげられる参考文献の数も限られている。今度の『事典』では、たとえば、室伏高信の思想が宮澤賢治に大きな影響を与えたといっているが、ということは書かずに、室伏は「農主工従」論で、宮澤賢治はそれを「半農半工」「半農半商」に言い換えているとだけ書いたはず。「トロッキーの名前など当時は出すこともはばかられた」式の意見を書いている××のまちがった判断は書かずに、『改造』に『永久革命論』の一部の翻訳が出ていて、それを賢治は岩手国民高等学校でかなり長く紹介していると書いた。また、賢治の蔵書目録を分析して、そのほとんどを賢治が購入したなどと書いた人にはふれなかった。いずれも「確信犯」として「無視」したのである。それと同じことを「ヘッケル」でもしたつもりである。

④なお、わたしが『事典』の「ヘッケル」の項目の参考文献に自分の論文をあげたのは、自分の意見の一部を本文で訂正したからである。鈴木健司氏は、わたしの見本原稿を見ているので、それがわかるが、そうでない人には、何が問題になっているのかもわからないだろう。

そして、鈴木健司氏は、「ヘッケル」項目の参考文献に、鈴木貞美は自分の論文しかあげていないと書いているが、正木晃氏がヘッケルについて語った小冊子をまずあげている。単なる見落とししか、それとも、わざと「無視」したのか知らないが、これは批判対象の偽造にあたる。研究者がしてはならないことではないか。

ただ、見本原稿ではなく、正規の本文中に「鈴木は早くから」云々と書いたのは、余分だったかもしれない。ヘッケルの思想をヨーロッパ20世紀への転換期の”vitalism”の代表として扱い、そして賢治との関係を論じていることの意味を、まったく鈴木健司氏が理解していないことが、天沢氏への手紙で明らかだったので、それが誘い水として働いた。この部分を再版の機会があれば、削ることはやぶさかでない。自己顕示などと思われることは、まったく本意でないからである。

ついでに述べておくと、わたしは、しばしば自分の論文の参照文献に自分の論文をあげる。そこでは結論のみまとめて述べてあるだけで、論証、実証、考察の過程や周辺の考察を省略している場合がほとんどあり、そのときどきに参照した文献をあげられないことも理由のひとつである。そこでは先行研究の批判を展開していることもある。わたし自身、自身の論考を批判的な媒介にして考察を進めてきた軌跡を留めておきたいからでもある。

要するに、問題意識を同じくする人に遡ってもらい、参考にしてもらいたいからである。

⑤残る一点は、鈴木貞美が「どのような経緯で、モネラ説を撤回したのか」というところだろう。わたしは、「見本原稿」の段階まで、ヘッケルのいう有機界—無機界の結節点としての「モネラ」が、「いみじい生物の名」足りうると考えていたが、「すべての勢力」の「勢力」が最初は「エネルギー」の翻訳語として記されていたこと、賢治はオストワルトのエネルギー—還元主義に深い関心を抱いていたことから、その解釈は無理だと考えるに至った。ただし、「モネラ」が無理だとしても、ヘッケルの無機—有機界連続観を賢治が否定したことにはならない。

「すべての勢力のたのしい根源／万象同帰のそのいみじい生物の名」は、同一のものの言い換えだから、賢治は「エネルギーの根源」として「生物」を想定していたことは、どう頑張っても変えられない。経典やお経の文句は、どう考えても「生物」ではない。「蓮華」は生物だが、「蓮華」に万象が同帰するなどという教えはないし、ましてや「エネルギーの根源」であるはずがない。賢治がいったい何を想定していたのか、ということについていえば、「空に羽を広げる透明な孔雀」など候補にあがるだろうが、「電子」は「エネルギーの根源」という関係ではないので、それを生物に見立てたとも考えにくい。そして、その何かについてトシと共通理解をもっていたものでなくてはならない。いまのわたしには決め手はない。

だが、これが先行研究にはない視点を打ち出していることはまちがいない。もちろん、この見解を批判することは自由だが、鈴木健司氏が旧説を繰り返しても、意味はないと思う。

⑥なお、鈴木健司氏は、「非難文」で、賢治がトシの耳許でささやいたことばとヘッケルは関係ないということを書いて、そのころには「ヘッケルの学説」が否定されていたという意味のことを書いている。ヘッケルの、どの学説の何が、いつ、否定されたのか。具体的に示すべきである。そうでなければ、論証にはならない。それをせずに勝手な口からでまかせをいうのは、研究者として無責任な態度といわれてもしかたないだろう。

そして、では、賢治が、ヘッケル博士のどんな学説を証明しようとしたのか、についての見解が必要だろう。この一句を「無視」する態度は、作品の一部をわざと「無視」して、自説を立てることになるが、それでよいか。

⑦先の「返事」のなかでもふれたが、実際、鈴木健司氏の当該論文以前に、わたしはヘッケルの「万物有生論」と宮澤賢治の関係に少なくとも数回、単行書や論文のなかで言及し

ている。進化論受容や大正生命主義についての一連の論考なので、タイトルに宮澤賢治の名前は出てこない。ただの指摘で、格別、突っ込んだ内容でもない。鈴木健司氏が当該論文のなかでそれをとりあげていないのは、知らなかっただけだろうが、鈴木健司氏の立論にとって、意味がなければ、いちいちとりあげる必要はない。

それよりも鈴木健司氏の場合、問題なのは、ヘッケルについて、宮澤賢治への関心の外で、延々と論じられてきたことに想像力がまったく働かず、宮澤賢治についてのプロパーの論文の軌跡のみを研究史と思いこみ、しかも自分が最初に重要と思いこんだ指摘を尊重する態度である。

そして、それに、鈴木健司氏がヘッケルについて、「原子論」対「エネルギー論」のスキームを離れられないという理由が重なる。そこで、わたしの「ヘッケル」項目の解説の内容、「生命エネルギーの循環論」といっていることの意味が理解できない。そのことは、今度の「非難文」にも歴然としている。自分のモノサシを絶対視しているので、他者の異なる立場や論理のしくみが「読めない」のである。よくあることだが。

わたしは、概念や分析スキームの点検ということを1990年前後から公に唱えてきた。そして、実際に、いつ、なぜ、その概念やスキームができたか、ということの解明に取り組んできた。『探究』もその一環である。その立場から書いた項目を「新しい視点から書かれたものでもなく」などと断言するのは、論者の立場、論の構成が理解できないことを自己暴露しているだけである。相手の論点が理解できず、しようともせず、一方的な裁断を下す態度こそ、研究者としての資格が問われるのではないか。

鈴木健司氏に、わたしの論考のすべてに目を通せ、などというつもりはない。ただ、非難や批判をするなら、相手の仕事について、その輪郭くらい知っておくことは最低限、必要ではないか。『探究』には宮澤賢治についての一節を収めてある。その目次だけでも見れば、自分とは関心の在り方がずいぶんちがうということに気がつくはずだ。鈴木健司氏は、鈴木貞美による先行研究をまったく知らずに「無視」し、相手の「先行研究の無視」を非難していることにならないか。『事典』の項目のヘッケルについての解説の内容を「無視」し、自分の論文の「無視」を言い立てる態度こそ、自己顕示というのではないか。

最後に。ともあれ、鈴木健司氏が紀要論文でわたしの「ヘッケル」項目を取り上げてくれたので、わたしの私信が届いていなかったことが明らかになり、また、わたしの立場も明確にする機会を得た。その点は、感謝したい。 (了)